令和７年度未来を創る学力向上支援事業に係る「未来を創る授業力向上協議会（中学校外国語）」

１　目的

各中学校及び義務教育学校後期課程の外国語科担当の教員等を対象に、言語活動の充実に向けた授業改善や、学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくりに関する説明・講義等を通して、外国語科教員の授業力向上に資する。

２　主催　大分県教育委員会

３　期日　令和７年５月２７日（火）

４　会場　コンパルホール　多目的ホール

５　日程

【１】開会行事　大分県教育委員会あいさつ　＜義務教育課　課長　小野　勇一＞

日頃の教育実践へ感謝。昨年度実施された大分県の学力調査質問紙調査では、英語の学習が好きと回答する生徒の割合が３年ぶりに上昇し、先生方の魅力ある授業実践の成果と捉えている。しかし、中学校中級程度（英検３級以上）と判定された生徒が 32%に留まっていること、特に長文読解問題の正答率が 41%と半数を下回っていることが課題。この課題を踏まえ、今年度は中学校英語指導力向上事業として、本協議会やAPU 交流事業などに取り組む。特に、中学校英語指導力向上協議会では、県の英語担当指導主事を各地区の部会に派遣し、授業研究や協議を通じて地域ごとの授業改善を支援する予定。今日は国立教育政策研究所の学力調査官による講義を通じて、学習評価を生かした授業改善や課題について貴重な話が聞けるので、協議会を踏まえ、大分県における中学校英語の課題に基づいた授業改善の推進をお願いしたい。

【２】行政説明及び協議「大分県における外国語科の課題と指導と評価の一体化」

＜大分県教育庁義務教育課 指導主事 二宮　健吾＞

◆自己紹介とアイスブレイク（英語でのペアワーク）

二宮指導主事の自己紹介（10 年以上中学校で英語教師をしていた経験や、ランニングが好き等）。本日のセッションではグループトークやペアトークがあるため、開始前に英語でのペアワークによる自己紹介を提案し、参加者にパートナーを見つけて会話するよう促した。「全員が一人にならないよう、周りに気づきながら交流することが大切である」とまとめた。

◆大分県の外国語教育の現状と課題：学力調査等の結果から

大分県の外国語教育の状況と課題について、資料とスライドを用いて詳細を説明。昨年度の県学力定着状況調査（中学１年生対象、４月実施）では、知識と活用の観点のうち、知識の定着に課題がある結果（偏差値 50 を下回る）が出た。具体的な問題例として、「Do you have any idea?」という質問に対して約半数の生徒が適切でない選択肢（例：「いいね」「楽しもうよ」）を選んでおり、基礎・基本の定着が必要である。また、日本英語検定協会の方々から「聞くことはとても良い」という評価を得た一方で、「読むこと、特に長文読解に課題がある」という指摘があった。これは県全体の結果であり、各学校で結果を分析して読むことや聞くことの対策に取り組んでもらいたい。

◆テスト作成の現状と課題

先生方へのヒアリングから、定期テスト作成を自己流で行っていたり、初任校でもらったテストを修正しながら使っていたりする現状があることがわかった。このような状況で、作成している定期テストが、新学習指導要領が求める力を本当に測れているのかという懸念がある。生徒の力を確かに把握することが資質・能力の育成に不可欠である。

◆大学・高校入試問題の変化が示す求められる力

入試問題や全国学力・学習状況調査の問題は、国や県からの「こんな力をぜひつけてください」というメッセージであるとして、変化する入試問題から求められる資質・能力について考える。

高校入試（15 年前 と 今年）: 15 年前の問題は、単語の知識や短いフレーズの理解で解答できるものが多かったのに対し、今年の入試問題は英文全体の内容を理解しないと解答できないように変化している。

大学入試（センター試験 と 共通テスト）: センター試験ではアクセント問題など知識で解ける問題があったのに対し、共通テストは英文の内容理解が不可欠な問題が多く、時間内に解き終わるのが難しいほど変化している。これらの変化は、学習指導要領の改訂や社会情勢とともに、求められる力が変わってきていることを示している。それに伴い、定期テストも求められる資質・能力を測るためにアップデートする必要がある。

◆学習指導要領が求める力と定期テストの役割

学習指導要領が求める「資質・能力」の 3 つの柱である、「生きて働く知識及び技能」「未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を確認。英語科の目標に当てはめてみると、知識・技能は外国語の音声や語彙、文法等の「理解」と、それをコミュニケーションで「活用できる技能」を身につけることが必要となる。思考力・判断力・表現力は、コミュニケーションを行う目的や場面・状況に応じて発話したり聞き取ったりすることが求められている。これらの力を育成する必要があると考えたとき、従来のテスト問題（例：日本語を英語に訳させる、正しい発音を問う、教科書本文をそのまま使用）では、今求められる力を測ることが難しいのではないか。

◆学習指導要領の目標とテスト問題の例

定期テストは年数回しか行われないため、知識のみを問う問題ばかりでは資質・能力まで到達することが難しい。テストを改善することで現状が良くなるかもしれない。知識・技能の目標である「理解」から「実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身につける」を目指す上で、あるテスト問題（現在進行形の誤り訂正）が提示され、改善の余地について考える時間を設定。参加者からの意見として、「実際のコミュニケーション場面を設定した上で、文脈から適切な形（現在進行形）を判断させる問題形式にするべき」と出された。参考資料には、回答に使う言語材料を明示せず、文脈や使用場面を設定して判断させる問題例が示されている。このように、テストにおいても知識・技能の観点から、実際のコミュニケーションでの活用力を測れているかという視点をもつことが重要である。

◆全国学力調査問題から見る評価の観点

全国学力調査（令和 5 年度）の問題例（5 番、6 番、7 番、8 番）を示し、それぞれが「知識・技能」と「思考・判断・表現」のどちらの観点を問う問題か、その理由を含めて考えるグループワークを実施。県内の正答率が示され、6 番の問題が比較的低かったことを確認。解答として、5 番が「知識・技能」、6 番、7 番、8 番がすべて「思考・判断・表現」を問う問題であると解説。学習指導要領の 20-21 ページに記載されている「読むことの目標」がこれらの問題に対応していることを説明し、6 番は「必要な情報を読み取る力」、7 番は「短い文章の概要を捉える力」、8 番は「要点を捉える力」を測る問題であることを押さえた。

◆各領域（話す・書く・聞く・読む）における評価のポイント

資質・能力を評価する際のポイントについて、領域別にまとめられた資料を提示。

話すこと・書くこと: 知識・技能の観点では「正確さ」（正しく書けているか、言えているか）を見る。思考・判断・表現の観点では「目的や場面、状況に沿った内容になっているかどうか」（内容）を見る。

聞くこと・読むこと: 知識・技能の観点では「話されたり書かれていたりすることそのもの」を理解できているかを見る。思考・判断・表現の観点では「目的や場面、状況などに応じて聞き取ったり読み取ったりすること」ができるかを見る。駅のアナウンスを例に挙げ、単に内容を聞き取るだけでなく、自分の目的地や時間といった状況に合わせて必要な情報を聞き分けることが、思考・判断・表現の観点での聞き取りであること

を確認した。

◆参加者による自作テストの検討と共有

参加者に対し、持参した昨年度の定期テストの各問題を、知識・技能、思考・判断・表現のどちらかに分類するよう促した。その後、隣の先生と気づきや課題についてシェアする時間を設定した。

◆長文読解力育成の課題と指導・テスト作成のヒント

大分県の課題である長文読解力について、その原因として考えられる点を説明。

課題 1: 定期テストの読むことの問題で、教科書本文と全く同じ英文を使っていること。これにより、生徒は初めて見る英文（初見）を読み取る練習ができていない可能性がある。高校入試や大学入試では初見の英文が出題されるため、どこで練習するのかが課題となる。

課題 2: そのようなテスト形式だと、生徒のテスト勉強が日本語訳を覚えることになりかねない。これは求められる力とは異なる。これらの課題を踏まえ、新しい英文をテストに活用するためのヒントをいくつか紹介した。

＜改善のためのアイデア＞

教科書ライブラリー: 問題データベースが全中学校に導入されており、高校入試や全国学力調査の問題などがカテゴリー別に検索・活用できる。

過去の教科書: 同じような内容であれば、過去の教科書を参考にすることができる。

ALT への例文作成依頼: ALT にゼロから作成を依頼したり、教科書本文の合間に一文ずつ追加・修正してもらったり、会話文を一人称の文章に変えたりするなど、具体的に依頼する。

AI（Gemini）の活用: （各自治体のガイドラインを遵守した上で）AI ツールを使って、語数、語彙レベル、内容、筆者の主張を含むといった条件を指定して英文を作成させることが短時間（例：4 秒）で可能である。同じ条件でも違う内容が出力されるため、これを元に修正したり、ALT への依頼に活用したりすることができる。

◆初見の英文読解力を高める指導法（グループ協議）

初見の英文の概要や要点を正しく読み取れる生徒を育成するために、どのような日頃の授業指導が必要かについて、個人で考えた後、グループで協議する時間を設定。根拠を持って解答することの重要性や、各段落のテーマを見つけてまとめる練習などが有効であること等を確認した。

◆概要把握の授業実践例と指導のポイント

昨年度行われた、概要を捉える力を養う藤川先生の授業実践例を紹介。この授業では、子どもたち自身から概要を捉える際のポイントとして「逐語訳しない」「各段落の 1 文目、2 文目に重要なことが書いてある」といった意見が出た。子どもたちがポイントを把握していること、そしてそういった指導が日頃から行われていることが大切である。また、ワークシートを使って各段落をまとめた上で、大切な部分に線を引いて関連付け、隣の人に伝えるといった活動も行った。さらに、藤川先生は語彙力育成のために「帯活動」（毎時間、毎朝の活動）を工夫しており、そのように知識・技能の着実な定着があったからこそ、応用的な内容（概要把握）の授業ができたと考えられる。参考資料には、概要把握や必要な情報の読み取り、要点の捉え方に関する具体的な指導法が記載されており、ぜひ参照してほしい。他の先生方の授業動画を見ることも有効である。

◆APU 交流事業と県指導主事によるサポート

今後の取り組みとして、APU（立命館アジア太平洋大学）との交流事業が改めて紹介。この交流を通じて生徒の様子が大きく変わったという中学校からの声がある。対面だけでなくオンラインでの交流も可能であ

り、時間もそれほどかからないため、遠方の場合や準備が大変な場合でも活用できる。別の取組として、県の指導主事が一緒に英語教育について話し合うために学校を訪問する。不明な点や質問があれば、メールで気軽に連絡してほしい。

【３】講義「指導と評価の一体化に向けた外国語科における授業改善」

＜国立教育政策研究所　学力調査官　贄田　悠　氏＞

◆指導と評価の一体化

（講義の冒頭で、二宮指導主事の行政説明及び協議の話に触れ、）指導と評価の一体化や定期テストに関する研修が少ないことに同意する。本日の研修は非常に良い機会である。他の先生方がどのようにテストを作成し、考えているかを知る機会は少ないため、貴重であると考えている。本日の講演では、指導と評価の一体化について一緒に考えたい。指導と評価の一体化はよく耳にする言葉であり、これは完全に一体であるべきだと考えている。指導と評価の一体化に加えて、もう一つ大切な要素があると考えており、それが「目標」であり、目標と指導と評価の一体化が重要である。まず目標からスタートし、「こういう力をつけたい」「ゴールはこういう姿だ」というところから始まり、そのためにどのような指導を行い、どのように見取っていくかという流れになる。指導と評価はぐるぐると回る関係にあるが、目標という言葉があまり表面に出てこないと感じているものの、先生方は必ず意識しているだろう。

◆2 つの評価：形成的評価と総括的評価

見取り（評価）の部分には２つの種類があることを明確にしておくことが大切である。

形成的評価: いわゆるフィードバック指導のための評価。これはすべての生徒に同時期に行うものとは異なり、生徒の発言や提出物などに対して、その都度どのように返していくかという評価である。子どもたちが何か返してきたときに、それに対して行うものであり、子供たちの発言を受けてそれをより良くするための指導のための評価である。

総括的評価: 成績をつけるための評価、見取りの評価。単元であれば単元末など、子どもたちの学習の成果を評価するために設定されることが多い。評価を毎時間しなければならないか、あるいはしなくて良いのかという質問は、どちらの評価をイメージしているかによる混乱である。形成的評価は毎時間行うが、総括的評価を毎時間つける必要はないと考えている。いずれにしても、評価のスタートは目標からである。形成的評価と総括的評価は時期の問題ではなく、機能が違うものとして区別することが大切である

◆言語活動と必要に応じた指導

言語活動とは、実際に英語を使用して、考えや気持ちを伝え合う活動のこと。言語活動だけを行えば良いのではなく、言語材料について理解したり練習したりするための指導の場面も当然必要になる。その際のポイントは「必要に応じて」行うという点であり、子どもたちをよく見取らなければ、「必要に応じて」指導を行うことはできない。子どもたちの見取りを丁寧に行い、それを指導に生かすことが重要。言語活動を通してうまくいかないことから子どもたちにとって必要感が生まれ、それに応じて練習の時間を設けるという流れになる。さらに、練習後はもう一度言語活動に戻して実際に使ってみることが大切であり、その練習が活きたかどうかの見取りも重要である。

◆評価の記録について

単元の途中で記録に残す評価は行わなくてもよいが、毎時間子どもたちの姿を見取っていく。力をつけていき、それが発揮できる場面を単元末や後日のパフォーマンステスト、定期テスト等で設定し、そこで記録に残す評価を行うという流れになる。毎時間記録に残すというよりは、力をしっかりつけることに注力し、力がついたらそれが発揮できる場面を作ってあげることが大切である。(埼玉県での自身の経験として、かつて授業案で丸ばかりつけすぎて評価になっていないと指摘されたことに触れ､) 自分もきっかけがあって指導の場面と記録に残す評価を意識するようになった。記録に残す評価は、全ての生徒に公平な条件で行うことが大切であり、ある程度条件を揃えたパフォーマンステストや定期テストなどが考えられる。ただし、子どもたちの成長を追っていく上で必要な記録や記述はあり得る。

◆新しい学力観について

新しい学力観として、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の３つの柱がある。これらが一体どのようなものなのかを理解しておくことが大切である。「生きて働く」知識及び技能、「未知の状況にも対応できる」思考力、判断力、表現力等、「人生や社会に生かそうとする」学びに向かう力、人間性等である。「生きて働く」知識及び技能 知識及び技能について、受け身の技能（聞くこと、読むこと）と発信の技能（話すこと、書くこと）に分けて考える。

※受け身の技能: そこにある情報をそのまま取り出すこと、正確に読み取ること。

※発信の技能: 伝える内容は決められているが、それをいかに相手に伝わるようにきちんと伝えるか、誤解がないように届けるかという正確さが重要である。 全国学力・学習状況調査の問題例を挙げ、機械的な問題（例：カッコに入る語を埋める、語を並べ替える）と、文脈に沿って表現を考える問題（例：会話の流れの中で適切な表現を選ぶ、メモをもとに原稿を作成する）を比較。生きて働く知識・技能につながるのは後者である。文脈に沿って書くことは以前から課題として挙げられていた部分であり、機械的な書き換えと文脈に沿った記述で通過率に大きな差が出ている。

◆思考力・判断力・表現力等の評価例

思考力・判断力・表現力等は、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、どのように表現するか、どのように読み取るかという点がポイントになる。

聞くこと・読むこと: 情報の精査や解釈。目的や場面状況に応じて、取得した情報を解釈すること。

話すこと・書くこと: 考えを形成すること。目的や場面状況に応じて、伝える内容を選んだり構成したり、表現方法を工夫したりすること。具体的な力として、必要な情報と不要な情報を分けて読み取ったり聞き取ったりすること、大まかな内容（概要）を理解すること、最も伝えたいこと（要点）を捉えること等がある。 全国学力・学習状況調査の例として、不要な情報も含むアナウンスから必要な情報を聞き取る問題、複数の資料から必要な情報を読み取る問題、英文全体の概要を読み取る問題、スクリプトから要点を読み取る問題などを紹介。要点を読み取る問題では、最も大切なものを選び取る力を問う。要点判断のヒントとして、例示を示す表現や繰り返しの表現に注目する読み方指導が有効である。

◆領域横断的な評価例

令和５年度の学力調査では、領域横断的な問題も出題している。どこに焦点を当てた力を測っているかを明確にすることが重要である。聞く・読むはあくまで書くことのヒントとなるように負荷を下げると良い。

◆思考力・判断力・表現力等の評価例（書くこと）

令和 5 年度の学力調査から、思考力・判断力・表現力等に関わる書く問題例を紹介。学校の英語版ウェブサイトに掲載する学校紹介文を書く問題があり、思考・判断・表現を働かせるポイントとして、以下の 3 点を挙げる。

場面・状況: 学校の英語版ウェブサイトに書くという状況（読み手は不特定多数）。

目的: 学校紹介なので説明する文章である。

形式: まとまりのある文章である。読み手が不特定多数であることから客観的な文章が必要であること、説明する文章であることから主語が"I"ばかりでは不適切であることに加えて単なる箇条書きではなくまとまりが必要である。この問題の結果があまり良くなかった原因として、中学生が客観的な文章（"I"以外の主語で書くこと）に難しさを感じている可能性がある。小学校での経験（"I"を使うことが多い）から、中学校では第三者や物事を説明する表現の経験を積ませることが、学力向上の上で重要であると考えている。

◆目標、場面・状況設定と指導の工夫

思考力・判断力・表現力を働かせるためには、コミュニケーションを行う目的や場面・状況等の設定が非常に大切である。それは、そのような設定によって聞き方、読み方、話し方、書き方が変わるからである。単に「自己紹介をしましょう」ではなく、「何のために自己紹介をするのか」という目的を工夫することで、どのような表現の工夫をするかという思考力が働くようになる。日頃からの積み重ねが重要である。

◆内容面の指導と言語面の指導

内容面の指導と言語面の指導について説明。

内容面の指導: 目標との関連で、思考力・判断力・表現力等に関わる指導。例えば、「行ってみたいと思ってもらえるように自分の街を紹介しよう」という目標であれば、その目標達成に常に立ち返るような指導（例：「今書いた内容は行ってみたいと思ってもらうという目的に近づくための表現になっているか」）が内容面の指導になる。コミュニケーションの目的（例：安心して暮らしてもらえるように街を紹介する）が明確であれば、正確さが非常に重要になる場面もある。

言語面の指導: 主に正確さに焦点が当たる指導。目標達成に必要な表現を指導すること。

◆目標への回帰の重要性（授業実践例）

授業実践の動画の一部を紹介し、先生が子どもたちの発言に対して「どんな表現が聞こえてくると思うか」などと問いかけ、英語の表現と状況を繋ぐサポートをしている様子について言及。また、別の授業例として、先生が授業の終わりに必ず「何が良かったか」を目標（この授業では「相手が納得できるように説明する」）に立ち返って問いかけている様子を紹介。これにより、目標達成のためにどのような視点で見れば良いか（例：事実を述べているか、論理的か、新しい視点があるかなど）を明確にしながら子どもたちにフィードバックを行っている。

◆学びに向かう力・人間性と英語力の相関

講演の最後に、英語が好きであることと英語力に相関があることに触れ、令和 5 年度の調査で質問紙の回答（好きか、分かるかなど）と正答率に相関が見られたという分析結果を紹介。

◆まとめ：指導と評価の一体化による子どもたちへのアプローチ

目指すのは、子どもたちが力を十分に発揮できる環境を整えること。評価の役割として、子どもたちが発揮した力を適切に評価して伸ばしていくこと、そしてまだ発揮できていないところに適切な支援をすることで、その力を確実に見につけさせ、伸ばしていくこと。指導と評価を一体的に行うことで、これらの子どもたちへのアプローチが可能になる。